

東大寺大仏殿と七重塔の巻

平安京に先んずること八十余年、奈良を中心とする平城京には、多くの文化遺産が存在しています。その筆頭とも言えるのは「東大寺」でしょうか。ここには修学旅行には欠かせない「大仏」が鎮座しています。東大寺の大仏殿は、大仏の鑄造終了後、758年に完成しました。その後1181年に南都焼討によって焼失、1190年に再建されました。しかし、災厄は再び降りかかり、1567年に再度焼失。その後、仮の大仏堂が建設されましたが、1610年の暴風で倒壊しています。損壊した大仏の修復と大仏殿の再建を決意した公慶上人は1684年から勸進活動を開始して、現存の大仏殿は1709年に完成しました。ただ、3代目の大仏殿は、当時国内にあった巨木を伐採しつくしてしまったことに加え、財政的に厳しい状況だったようで、高さとお行きは天平時代とほぼ同じですが、間口は創建時の約3分の2に縮小されて



天平創建時 → 現在（イメージ）

ています。それでも、巨大であることに変わりはなく、新しい工法の巨大な木造建築物が外国で誕生しても、在来工法による木造建築では世界最大であるというポジションは今でも譲っていません。

このように、大仏殿は何度か修復・再建されましたが、中に鎮座する大仏も当然、同様に地震や戦乱で損傷し、そのたびに修復が繰り返されてきました。今の大仏は奈良、鎌倉、室町、江戸の四つの時代を経て修復された姿となっています。752年に開眼供養をしてから間もない786年、一部が重量のためか破損します。そして855年には、地震のために頭部が落下するという事件が起きます。さらに1180年の南都焼討ちによる大仏殿焼失に伴い、頭部や手が損傷。さらにさらに1567年、再び兵火に見舞われて大仏殿が焼失、大仏も大きな損傷を受けてしまいます。その後、しばらくは雨ざらしとなっていたが、全体の修理が施され、1692年に開眼供養会が行われました。天平時代の鑄造当時の形を残しているのは、左足を覆う衣の一部と台座の部分のみで、顔の部分は4代目となっています。



このように、東大寺は幾多の試練を乗り越えて現在に至っていますが、災厄に見舞われたのは大仏殿だけではありませんでした。創建当初の境内にはなんと、東西に巨大な七重塔が建っていたということです。この塔も、平安中期に西塔が落雷で焼失したのち、東塔は1180年の南都焼討で焼失。その後修復されはしたものの、1362年に落雷で再び焼失してしまいました。1970年（昭和45年）に大阪で開催された日本万国博覧会では、古河グループがパビリオンとして東大寺七重塔を再現しました。万博終了後にはその上部、相輪部分だけが東大寺に寄進されています。



奈良文化財研究所の報告書より

東大寺七重塔にも復興・再建の動きがあります。ただ、この塔の規模については、高さ約70メートルと約100メートルの二つの説があって、どちらかということで明治時代から議論が続いていました。しかし令和6年(2024)4月24日、奈良文化財研究所は創建時の東塔について、高さが約68mであるという復元案を研究成果として公表しました。詳しい復元案は同研究所の報告書に詳しく記されていますが、もしこの七重塔が再建されれば、現在国内一位の京都東寺の五重塔57mをはるかに超える塔が出現することになります。木材資源の枯渇や資金の問題など、ハードルは高そうですが、実現すれば雄大な天平伽藍の再現に近づきます。何年後になるかはわかりませんが、大いに期待して待つことにしましょう。